アリス・ピンチョンの悲劇と ホーソーンの人種意識

福　岡　和　子

1

最近、ホーソーンを人種との絡みで論じる批評が出るようになった。ホーソーンは新批評によって評価が確立した作家と言ってもいいが、彼を人種問題との関係で論じるこうした現象は、作品を書かれた時代や書いた作家自身と切り離そうとした新批評とは隔世の感がある。その代表的なものとしてジーン・フェイガン・イェリンの「ホーソーンと奴隷制問題」を挙げることが出来る[1]。イェリンはホーソーンがなぜ奴隷制問題を扱わなかったのかと問う。当時のアメリカが奴隷制をめぐって議論沸騰していたことは、今更言う必要もないが、イェリンの議論の興味深いところは、ホーソーンをめぐる状況をきわめてローカルに設定し、これでも奴隷制問題に無関心でいられたのかと、細かい事実を積み重ねていく点である。つまり、彼女の戦略の一つは、社会的背景をアメリカ社会とかニュー・イングランドとかいった広い枠組みではなく、彼が実際住ん

1　Jean Fagan Yellin, "Hawthorne and the Slavery Question," *A Historical Guide to Nathaniel Hawthorne* ed. Larry J. Reynolds (Oxford University Press, 2001) 135-164.

でいたセイラムに焦点を絞ることであった。

セイラムと言えば、言うまでもなく魔女狩り裁判が想起されるが、イェリンによれば、それだけではなく18世紀ギニア奴隷貿易の基点として栄えた港町でもあった。船はセイラムを出てアフリカのギニアに向かい、そこでラム酒を売ってアフリカ人奴隷を買い付け、帰りは西インド諸島やアメリカ南部の港に立ち寄り、奴隷を売って代わりに砂糖や糖蜜を買い付けたのである。当時セイラムに暮す黒人は既に自由の身ではあったが、1830年ごろから町は人種問題をめぐる政治的論争に巻き込まれた。後のボストンがそうであったように、子供の入学時における人種差別をめぐって、また、反奴隷制論者の活発な活動をめぐって、殺人や襲撃といった暴力的事件が頻出したという。

過去の細かい事実を積み重ねることでイェリンが指摘しようとしたのは、1830年から40年にかけてセイラムに住んでいたホーソーンにとって、黒人は決して"invisible man"ではありえなかったはずだということである。当時のセイラムに住んでいる限り、黒人は日常的に出会う存在であり、また黒人奴隷制の問題も、どういう立場に立つにせよ、知らないではすまされない非常にホットな論争を巻き起こしていたのである。であれば、そこに住んでいたホーソーンが、どうしてその問題にまったく無関心でいられたのか。

さらにイェリンは興味深い疑問を呈している。『アメリカン・ノートブックス』の次の記述を見ると、ホーソーンが1842年から45年にかけて奴隷制の問題を文学的主題として取り上げようとしていたことが推察できる。

> To point out the moral slavery of one who deems himself a freeman. (Wednesday, June 1st, 1842)

> A moral philosopher to buy a slave, or otherwise get possession of a human being, and to use him for the sake of experiment, by trying the operation of a certain vice on him. (Wednesday, June 1st, 1842)

Sketch of a person, who, by strength of character, or assistant circumstances, has reduced another to absolute slavery and dependence on him. Then show, that the person who appears to be the master, must inevitably be at least as much a slave, if not more, than the other. All slavery is reciprocal, on the supposition most favorable to the rulers. (Saturday, July 27th, 1844) [2]

これら「隠喩的奴隷制」(metaphorical slavery)、(ホーソーン自身の言葉を使うなら「精神的奴隷制」(moral slavery)) と、現実の黒人奴隷制との間に何らかの関連性があるという認識が、なぜホーソーンにはすっかり抜け落ちているのかという疑問をイェリンは呈しているのである。つまり、一人の人間が別の人間の絶対的支配に置かれる状態、それが共通項としてあるにもかかわらず、それにホーソーンは気づいていないのか、或いは故意に目をつぶっているとしか考えられないことを問題としているのである。

確かに二人の人間関係において、一方が心理的に他者を支配する状況は、ホーソーン文学を読んだ人なら誰でもいくつかその事例を思い浮かべることが出来る。たとえば『緋文字』のディムズデイルとチリングワースの関係である。妻の姦通相手を突き止めようとする執念深いチリングワースは、同居する牧師自身の心を本人は気がつかないうちに陰険な支配下において苦しめた。問題は、『ノートブックス』が示すように、ホーソーンが繰り返しこうしたテーマにひきつけられ、又彼自身が用いる言葉遣いはまさしく奴隷制を想起させるものでありながら、アメリカにおいて現実に多くの黒人が苦しんでいる奴隷制そのものに対する関心がまったく欠如していた、まさにそこにある。

そこで本論文では、『ノートブックス』ではなく、「精神的奴隷制」を扱ったかに見えるホーソーンの作品そのものをもう一度読み返すことで、彼の言う「精神的奴隷制」が作品のなかで実際はどのように具体化されているか確認し

2 Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, ed. Claude M. Simpson (the Ohio State University Press, 1932) 236-253.

ようと思う。もし、その点において作家自身の作品理解とテキストとの間に何らかの乖離がみいだされるとしたら、それが何を意味するものであるのか問われなければならないだろう。ひょっとすれば、そこには「奴隷制」そのものに対する作家自身の偏った認識がうかがえるかもしれないのである。

2

以上の観点から特に注目したいのは、『七破風の家』における作品内物語、「アリス・ピンチョンの物語」である[3]。それは一人の男が催眠術を用いて一人の女の魂を支配下に置き、自分の命ずるままに行動させる物語であり、まさに一見したところ、『ノートブックス』にあった「精神的奴隷制」をテーマとした作品にみえるからである。

事の発端は、先祖伝来のニュー・イングランドの屋敷を嫌いヨーロッパ生活が長かったアリスの父親が、先祖から伝え聞いていた土地譲渡の証書を思い出し、何とかしてそれを手に入れたいと思うようになったことである。その証文がモールの先祖によって密かに隠匿されたのではないかと疑念を抱き、彼はモールを屋敷に呼びいれ、証文の在り処を聞き出そうとする。そこでモールはアリスを一種の霊媒として用い、その後も自分の思いのままに操り死に至らしめるのである。

この「アリスの物語」においてまず特筆すべきことは、そこに展開する人間関係が、独立した対等の個人と個人が結ぶ関係とははるかに異なる点である。言い換えれば、登場人物のいずれもが一見、土地、金銭への欲望や性的欲望といったきわめて個人的衝動に強く突き動かされて行動しているように見えなが

3　Nathaniel Hawthorne, *The House of Seven Gables* ed. Seymour L.Gross (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1967). This text is that of the *Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* produced at the Ohio State University Center for Textual Studies. 以下、作品の引用は全てこの版による。

ら、実は彼らの行動を始めから規定しているものは、その社会を支えているシステムの一つ、ここでは階級制度であるということである。この階級の問題は、言うまでもなく物語の外枠である『七破風の屋敷』そのもののテーマの一つであり、デイヴィド・レヴェレンツの言い方を借りるなら、その語り手にとって社会の基本構造は“aristocrats and plebeians”から成り立つものであり、「産業革命以前の階級間の軋轢」は既定の事実であった[4]。しかし、ミドルクラスの台頭がそれまでの社会構造に揺さぶりをかける19世紀アメリカを反映した『七破風の屋敷』よりは、レヴェレンツの言い方は、むしろ「アリスの物語」の語り手にこそ当てはまる。エイミー・シュレンジャー・ラングも言うように、確かにアメリカにはかつてのヨーロッパのように法的、制度的に認められた階級制度が存在したわけではないので、ここで「階級制度」という言葉を用いるのは適切ではないかもしれない[5]。しかし、小説全体が、個人主義や人々の地理的・階級的流動性が顕著となる19世紀中葉のアメリカに置かれているのとは異なり、この物語内物語は産業革命以前の18世紀アメリカに設定されており、人々の意識の根底には階級意識が強く支配していることは、以下に見ていくように明らかである。

ピンチョン家を訪れたマシュー・モールは、屋敷に入る前から攻撃的でいらだっている。それは、当然予期されるように、祖父が初代ピンチョンの企みにより魔女裁判の犠牲者となり土地を奪われたことへの怨念のせいだけではない。実は彼の階級意識がその根底にある。それが典型的な形をとって現れるのは、「召使や職人」(191) が通常通るべき「裏口」はいうに及ばず、「その上位に位置する商人」(192) が入ることになっている「横の入り口」をも敢えて無視し、ノッカーを鳴らして正面の入り口から入ろうとするときである。ここには、

4　David Leverenz, *Manhood and the American Renaissance* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1989) 91.

5　Amy Schranger Lang, *The Syntax of Class: Writing Inequality In Nineteenth-Century America* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2003) 1.

本来なら自分の屋敷であったはずという思いのみならず、本来なら自分は労働者階級ではなく、この屋敷の所有者と同じ紳士階級であるはずだとする意識が強く働いていることを示すものである。

この階級意識は、マシュー・モール特有のものではなく、物語の登場人物全てに備わったものである。屋敷の黒人奴隷は、モールがアリスのことを口にするとき、「卑しい大工のくせに！お嬢様を遠くからですら見る資格もない。」(188) とつぶやく。同じくモールが正面の入り口から入ってくるのを見たときにも「単なる大工ふぜいが偉くなったものだ」(192) と思う。つまり、自らは最下層の奴隷でありながら、皮肉なことにモールを見る目は主人と同じ高みにあり、職人階級のモールを見下げているのである。屋敷の当主ピンチョンは、モールを屋敷に呼びつけておきながら、部屋に通されたモールに対してすぐに応対しようとはしない。語り手によると、それは「当主が何らかの失礼や無視を意図的に行ったというのではなく、モールのような身分の人物が、礼儀正しい振舞を期待するとか、そもそもそんなことを思い煩うだろうとは思いもかけなったからだ」(194) という。つまり、当主にとって下層の者が自分の属する階級と同じことを要求するなど全く思いも寄らないことなのである。

また、今やヨーロッパに住むことの多い当主がアメリカの広大な土地を何としても獲得したいと思うにいたったのは、土地そのものを欲しているというよりは、イギリス国王から「伯爵」の称号を金で買いたいという野心を持っているからだという。「ピンチョン卿」と呼ばれたいという強い階級的野心である。その娘も階級意識を身につけている点は父親と同じである。「生まれついてのレディ」とされるアリスが始めてモールに接したとき、彼女が何よりもまず気づくのは、大工という職業・階級を示す彼の服装である。したがって、若い二人の出会いは、何よりも階級の異なる二人が互いの階級を意識する出会いとなった。

As Alice came into the room, her eyes fell upon the carpenter, ...clad in

a green,woollen jacket, a pair of loose breeches, open at the knees, and with a long pocket for his rule, the end of which protruded; it was as proper a mark of the artizan's calling, as Mr. Pyncheon's full-dress sword, of that gentleman's aristocratic pretensions. A glow of artistic approval brightened over Alice Pyncheon's face; she was struck with admiration–which she made no attempt to conceal–of the remarkable comeliness, strength, and energy of Maule's figure. But that admiring glance (which most other men, perhaps, would have cherished as a sweet recollection, all through life) the carpenter never forgave. It must have been the devil himself that made Maule so subtile in his perception. (201)

しかし、普通であれば言葉すら交わすはずのない二人の出会いが、後に恐ろしい関係を結ぶようになってしまう。その原因は、二人がここで二つの次元において対峙したからである。この引用がつぶさに示すように、アリスの視線はモールの服装の一つ一つに順に移動していき、最後にそれが大工職人のものであると確認するにいたる。そのようにまず大工の服装を意識するような女性でありながら、同時に彼女はモールの男性的魅力に引き付けられている。つまりアリスは大工モールを見た瞬間に、彼の男性的魅力に思わず引き付けられたのである。言い換えれば、その男性的魅力は、父の階級である紳士階級にはすでに失われている「強さ、エネルギー」という職人階級の特性と強く結びついているものであった。しかし、彼女自身は、一時的にせよ自分がそうした特性に強く引かれたことなど決して認めはしなかったであろう。なぜなら相手は自分の父の属する紳士階級とは異なっているのだから。

そして、モールも大抵の男なら喜んだかもしれないアリスの賞賛のまなざしを許すことは出来なかったのである。語り手の言葉を借りるなら、モールが求めていたものは、「彼も彼女と同じ成分からできた人間であること、そして仲間であることを認めてもらうこと」(201) であったはずである。したがって、

彼女のまなざしの意味を意識した瞬間、彼の欲望はサディステックな復讐心へと変貌してしまう。相手によって何よりもまず大工として認知されてしまうということ、しかもその上で性的な力を持った男と認知されたことを、彼は自分が対等の人間として認められたのではなく、人間ならぬ「粗暴な野獣（a brute beast）」として認知されたと受け取ったからである。ここにはモール自身の階級意識、階級的劣等感が強く働いていると言っていいだろう。

> "Does the girl look at me as if I were a brute beast!" thought he, setting his teeth. "She shall know whether I have a human spirit; and the worse for her, if it prove stronger than her own!" (201)

以上のような階級意識と性的欲望が交錯した二人の出会いの瞬間を正しく理解するならば、催眠術を施し彼女を一種の霊媒として先祖を呼び出そうとする続くシーンは、一見非現実的で神秘的なゴシック的仕立てにもかかわらず、まったく違った様相を帯びてくるはずである。そのシーンは上層階級の女性のまなざしに対して大工モールが目論む復讐のシーン、サディステックな欲望を満足させるための処女アリスのレイプシーンだと読めるのではないだろうか。以下の引用において語り手が用いている暗示的表現を見れば、そうした解釈がそれほど的外れではないことが分かるはずである。ラングも同じくこのシーンに見られるきわめて性的な含みを持った言語に注目し、「レイプとしか解釈できない」とまで言い切っている[6]。

> Setting aside all advantages of rank, this fair girl deemed herself conscious of a power–combined of beauty, high, unsullied purity, and the preservative force of womanhood–that could make her sphere

6　Lang, 36. "Maule, "standing erect" with his carpenter's rule "protrud[ing]" from his pocket, takes "possession" of Alice while her father averts his eyes."

impenetrable, unless betrayed by treachery within. She instinctively knew, it may be, that some sinister or evil potency was now striving to pass her barriers; nor would she decline the contest. So Alice put woman' might against man's might; a match not often equal, on the part of woman. (203)

大げさな言い方をすれば、ここには男女の熾烈な性的闘争と権力闘争がある。モールは女性性を蹂躙することにより、上層階級に位置する女性を自分の支配下に置こうとした。一方、アリスは内なる裏切り、つまり一時的にせよ自分自身が気づかぬうちに相手の男性的魅力に惹かれたために、今や処女性を踏みにじられようとしているのである。後に、モールの支配下にあるアリスがいつものように呼び出される日は、「労働者の娘」とモールが結婚する日であり、「その二人が一つになったとき」(209) 彼女は催眠状態から覚醒させられる。ここにも同じく階級意識と性的意識とが強く作用したモールのサディステックな復讐心を容易に見て取ることができるだろう。

3

始めに“ホーソーンと奴隷制”などと言っておきながら、以上のような一見奴隷制とは無関係にみえる「アリスの物語」を引き合いに出したのには、それなりの理由がある。それは、物語をほぼ語り終えたとき、アリスに対して語り手が吐露する哀れみの感情表現に私は引っかかるものを覚えたからである。

But alas, for the beautiful, the gentle, yet too haughty Alice! A power, that she little dreamed of, had laid its grasp upon her maiden soul. A will, most unlike her own, constrained her to do its grotesque and fantastic bidding. Her father, as it proved, had martyred his poor child

to an inordinate desire for measuring his land by miles, instead of acres. And, therefore, while Alice Pyncheon lived, *she was Maule's slave, in a bondage more humiliating, a thousand-fold, than that which binds its chain around the body.* (208. Italics mine)

確かにアリスは催眠術にかけられてからというもの、惨めなまでにモールの思うままに操られるようになってしまった。モールが笑えといえば、そこが教会であろうが葬儀の場であろうが笑い出すといった具合である。「どこにいようが、何をしていようが、彼女の魂は彼女自身の制御から抜け出し、モールに屈服したのである。」(209) その意味ではアリスは実際モールの「奴隷」となったという言い方は間違ってはいない。しかしそれにしても、もう一度上記の語り手の嘆きを読むなら、そこには決して看過できない、いくつかの重要な問題点が含まれているように私には思われる。

語り手は、アリスについて、当時のアメリカ社会のキータ―ム「奴隷」という言葉を用いた。「父親が広大の土地を獲得するために娘を犠牲にした」という意味の語り手の言葉、及び、「あんたが古びた証文を掴もうとして自分の娘を売ったとしたら、それがわしの罪になるのか？」(206) というモール自身の言葉が示すように、娘は紛れもなくこれら二人の男の間で商取引の対象となったと考えてまちがいはない。語り手は、しかし、このようにアリスのことを文字通り売買の対象、つまり「奴隷」であると示唆しておきながら、すぐその後で今用いたばかりの「奴隷」という言葉の持つ一般的概念を完全に変えてしまう。言い換えるなら、語り手の念頭にあっては、奴隷には鎖につながれ肉体を束縛された「奴隷」と、肉体を束縛されているわけではないが精神を拘束された「奴隷」の二種類があり、しかもそれら二種類の奴隷ははっきり区別して認識されているようなのである。さらに語り手は、それら囚われの身について、肉体を拘束されるよりは精神を拘束されるほうが、一千倍も屈辱的なことだと考えている。「男は女の繊細な魂を弄ぼうとして荒々しい支配のもとにおいた。」(210) つまり、アリスの状態は、同じ「奴隷」という言葉を用いて表現されたに

もかかわらず、通常の奴隷とは異なり、肉体ではなく精神を拘束された「奴隷」なのだと語り手は言いたいのだ。以上のような考え方を前にして、読者は物語の持つ強いインパクトから妙に納得してしまい、なんら疑問に思うこともなく、語り手の嘆きに同調し、彼のコメントに同意してしまうかもしれない。実際、この箇所がこれまでの作品批評において問題視されたことはなかったのではないだろうか。

しかし、先に言ったように、ここには見逃せない問題点がある。第一は、果たして、肉体を鎖によって束縛された「奴隷」が、肉体は拘束されていないものの精神を拘束された「奴隷」に比べて、それほどの屈辱を覚えないですむものなのだろうか。鎖につながれた奴隷はたいした屈辱感に苛まれるはずはないとする前提に語り手は初めから立っているのではないか。第二は、そもそもこの二種類の拘束状態は、語り手が考えているほどに明瞭に区別できるものであるのか。つまり、肉体的に囚われの身と精神的に囚われの身は、それぞれに別の状態といえるのかどうか。第三に、アリスの束縛状態は、語り手の言うように、果たして、その二種類のうち精神のみを拘束された範疇に本当に入るのかどうか。これら相互に関連する三つの疑問点を順次考察していくと、私には上で引用した語り手のコメントに不誠実なものを感じ取らざるを得ないのである。

いうまでもなく、この物語は外枠の小説の登場人物であるホルグレイブが創作した作品ということになっている。しかし、その心理的緊張感、緊密な構成など駆出しの作家兼写真家の手になるものとは到底思えない、独立した作品として十分読むに耐えるものである。したがって、作品の語り手は作者ホーソーンのペルソナとみなしても、まずまちがいはないだろう。しかしここで注意を喚起したいのは、「アリスの物語」は作家ホーソーンが抱いていたらしい作品認識とずれがあるのではないかということである。つまり、物語はホーソーンが意図した枠組みからは逸れた結果となってしまった可能性がある。或いは、作家自身が結果として作り上げてしまったものを、当時の読者を意識して実際

とは違うベールで包み込んで差し出そうとしていた可能性も十分考えられるのである。そして、そのような作家自身が気づかなかった盲点（あるいは逆に、気づいていたかもしれない作家自身による意識的操作といったほうが正確かもしれないが）が、ひょっとしたら彼の人種意識と何らかの関わりをもっているかもしれないのである。

つまり私が言いたいのは、われわれが物語に見たものは、決して一方が催眠術によって他方の魂を操る支配関係、ホーソーン自身の言葉を使うなら、単に「精神的奴隷制」の悲劇などというものではないということである。ニナ・ベイムは、ここにアリスの性的囚われの状況を読み取って次のように表現している。

> In the fantasy, an observant and embittered Maule recongnizes in the "pure" Alice Pyncheon an unacknowledged sexual attraction which he enflames into a violent physical passion. Alice,...is controlled by internal, but invisible forces–invisible because denied. In this case it is her own sexual nature, whose responsiveness is evident to Maule, that she refuses to recognize....Her inability to conceive of such internal treachery–her distorted self-understanding–delivers her to Maule. Like all Pyncheons, she rejects, suppresses, or denies the forces of passion and impulse that underly human nature. Her later torments, too, result from the continued frustration of this inadmissible and yet obvious passion....she is killed, aptly enough, by the irrevocable loss of her passion's object when Maule marries.[7]

アリスの性的抑圧状態についてのベイムの説明はかなり正確なものではあるが、恐らくベイムには先のシーンがレイプシーンだという認識がないために、

7　Nina Baym, "Hawthorne's Holgrave: The Failure of the Artist-Hero," *Critical Essays on Hawthorne's The House of the Seven Gables* ed. Bernard Rosenthal (New York: G. K. Hall & Co., 1995) 66.

アリスの性的肉体的拘束を、彼女自身の、或いはピンチョン家に共通したエロス衝動の否定としかみていない。しかし、アリスが「一千倍もの屈辱感」を味わわされているのは、彼女自身が、暴力的に辱められた肉体を、まだなお辱めた男から切り離すことが出来ないためなのである。言い換えるなら、ベイムは、それほどの激しさをもってアリスに復讐したモール側の怨念を十分に理解しているようには見えない。われわれが既に見たように、モールは、彼自身や彼の先祖たちが受けてきた非道な扱いに対する怨念、憤りを、その総量そのままに、或いは倍加してアリスの肉体に復讐し辱めたのである。

「アリスの物語」が示しているのは、性的暴力による支配関係である。性的暴力により他者の精神も肉体もともに抗いがたく冷酷に支配し踏みにじり、死へと平気で至らしめる、きわめて非道な関係である。どうしてそういうことが起こってしまうのか。それは上で詳しく見たように、意識する、しないに関わらず、登場人物らの先祖、及び彼ら自身が囚われている社会通念、階級意識と密接に関係している。つまり、下層階級を相手にしたとき、自己と変わらぬ人間的感情があることを端から否定し、平気で蹂躙してきた社会構造がそこにはあり、その結果として、被抑圧者にサディステックな虐待という復讐を実行させてしまうのである。モールの性的奴隷と化したアリスは、彼女の属する階級が下層階級に与えてきた虐待を、今、形を変えて受けているということができる。その意味で彼女は彼らの社会システムの非人間性を象徴的に表現している（させられている）ということができるのである。

以上のような自己と他者の関係は、かつてのヨーロッパ社会とは異なり、現実の19世紀アメリカ社会においては、階級制度よりはむしろ奴隷制の下で悲惨な現実となった。われわれは今、その多くの例をいわゆる「奴隷物語」（slave narratives）に読むことが出来る。それら奴隷物語は、奴隷たちの悲惨な現実を、個人に特有の悪徳に帰すのではなく、一つの「邪悪なシステム」（798）の下で繰り返される悲劇として告発したのである。その代表的なものに、実際に

奴隷であったハリエット・A・ジェイコブズ自らが書いたとされる『奴隷少女の生涯における出来事』がある。ペンギン版の編者ネル・アーウィン・ペインターはこの作品について次のような指摘をしている。

> It shows, first, the myriad traumas owners and their agents inflicted upon slaves. Bloody whippings and rapes constituted ground zero of the enslaved condition, but in addition, slaves were subject to a whole series of soul-murdering psychological violations: destruction of families, abandonment of children, sexual harassment, verbal abuse, humiliation, contempt. Jacobs details the physical violence so common in her Southern world, but she especially stresses the assault on slaves' psyches.[8]

ジェイコブズが告発したかったものが、奴隷に加えられた肉体的暴力、性暴力であるだけでなく、精神的暴力であったことは、皮肉なことに、われわれにとって非常に重要である。『七破風の家』の10年後に出版されたジェイコブズの自伝を執筆当時ホーソーンが知らなかったのはいうまでもない。しかし、彼がその自伝を仮に読んでいたとしたら、決してわれわれが先に見たような不誠実なコメントは書かなかったのではないだろうか。或いは書けなかったのではないだろうか。ジェイコブズは、自分が主人の性的欲望のままに翻弄される状況を、繰り返し「邪悪な制度」[9]に帰してその精神的荒廃を悲しむと同時に糾弾した。奴隷制の下では確かに肉体は鎖によって拘束され、また、とりわけ女性の奴隷はレイプなどの性的暴力を加えられることが日常的だったといってもいい。しかしそれは決して肉体のみを苦しめるといった単純なものではなかっ

8　Harriet Jacobs, *Incidents in the Life of a Slave Girl Written by Herself* ed. Nell Irwin Painter (Penguin Books, 2000) ix.

9　Jacobs は "this bad institution" (782), "their peculiar institution" (790), "this wicked system" (798) と繰り返している。

たのである。「アリスの物語」において、ホーソーンも階級社会における性的暴力と精神的荒廃とを描いた。しかし、女性に加えられた性的暴力とその被害者の苦しみを実際には強い筆力で持って描いておきながら、彼はそれを現実の奴隷が受けるはずのない「精神的悲劇」としていわば昇華し、当時の読者に提示しようとした。その時、ホーソーンは図らずも現実の奴隷制に対する自らの認識不足、あるいは現実の奴隷たちが味わっていた苦しみに対する不誠実な態度を露呈してしまったということができるのである。